

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成15年9月5日発行(毎月5日1回発行)  
第43巻9月号(通巻530号)

# 風土

9



夏  
旺  
ん

神  
蔵

器

炎  
天  
の  
芯  
の  
暗  
さ  
や  
く  
す  
り  
噛  
む

涼  
し  
か  
り  
鯉  
の  
一  
擲  
玉  
の  
ご  
と

光  
悦  
の  
茶  
盃  
七  
種  
や  
苔  
の  
花

泉  
の  
ご  
と  
泣  
く  
よ  
り  
先  
に  
子  
の  
泪

か  
は  
ほ  
り  
や  
雲  
の  
高  
浪  
夕  
焼  
け  
て

汗引きて 刀助とうすけ包かねに 打粉 打つ

家系図の末にわが名や風入るる

賢兄の十三回 忌竹の咲く

七月や玲瓏とある 蛇笏の句

蛇笏より一つ 若かり 夏旺ん

雲の峰 空海の杖 近づけり

噴水の中の 噴水時 彦逝く

# 竹間集

同人作品



遠郭公

高橋 邦夫

遠郭公鉄塔あるきだしさうに  
鎌倉は五山七口茅の輪暮れ  
桜桃挽ぐわれに青空殺到す  
わだかまり解け風鈴のやさしかり  
サンシャイン地下に人待つサングラス  
子子といふ字がうごきだしにけり  
少年に父の剛球夏旺ん

待たされて  
南 うみを

青柿や五右衛門風呂が伏せてある  
太宰忌のいつしか窓に雨の粒  
夏萩は水面を擦つて吹かれをり  
待たされて青葭原の風の中  
青芝自鳴が怠惰の足うら刺しにけり  
熊蟬の飛びうつりたる大樹かな  
千年の杉の洞や清水湧く

月 日  
大竹 淑子

老鶯やゆふべの刻の濃くなりぬ  
飲食の露を育てて寺領畑  
鮮しき紫みせてかきつばた  
睡蓮のつぼみ赤子の目のやうに  
大手毬房ごと散りし狼藉や  
桐咲いて薬師の谿の空くもる  
菖蒲実実に月日流るるはやさかな

薫風

島谷 征良

木洩日の波へ浦島草の糸  
思ひ出し笑ひのごとくけふの余花  
薫風や表情読めぬ石仏  
碑の彫のふかさよ蝸牛  
網戸して夜の山気をほしいまま  
水中の藻も薫風のうちにあり  
雨降れば雨に輝き今年竹

あやめ草

齊藤 小夜

正座して涼しと思ふ風炉点前  
文机に藍の水滴夏座敷  
ががんぼのゆらして一枚杉戸かな  
手に掬ふ泉や碓氷峠みち  
経巻かれあるやもしれず落し文  
現し世の先は知らずよあやめ草  
羅を着て腕時計はづしけり

夏盛ん

徳丸 峻二

雲の峰模型飛行機Uターンす  
子が真似て父の後ろ手柿の花  
峰雲や水飲みに起つ熔接工  
肩車の子連れもありて山開き  
泉に手漬けてしばしや婚近き  
風鈴を弾きて鳴らす妻の留守  
汗の手や手紙重ねて封を切る

立葵

宮川みね子

二階には夫の書齋やほととぎす  
山法師峽に日照雨の走りけり  
ふるさとにあをむ山脈蝸牛  
投げ苗に水輪大きく生まれけり  
夕空の紺まだありて花石榴  
階段の長さを仰ぐ小暑かな  
さざ波のごと地震過ぎぬ立葵

梅 雨

— 宮川みね子 —

水で顔打ちて夏くるきざしかな  
畦川に唄のありけり業平忌  
日の落ちて残る明るさ八重十葉  
筆濯ぐ音ひびきけり梅雨の月  
病む犬の眼の澄み青梅雨胸騒ぎ  
てのひらに犬の吐く息明易し  
犬死んで首輪をはづす合歡の花  
黒揚羽ちさき柩を輝かす  
しろばなほたるぶくろ悲のいろ灯しをり  
さびしくてならぬ夏至の日暈拭く

鶏小屋の屋根にかぼちやの花のぼる  
あらうみの赤魚を煮る立葵  
七七忌兄へ夏霧のぼりゆく  
合掌の梁の太さや雲の峰  
忌の膳に青萩の風通りけり  
螢火の九頭竜川に旅の果つ  
生国の仕舞湯に身を青葉木菟  
炎天のそしらぬ顔の残りをり  
白地着てひと日の命張りにけり  
七月来る真白に水煮えてをり

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

落し文西行桜のもとにかな  
花は葉に西行桜人佇たす  
竹落葉むかしをとこの塩竈  
業平忌過ぎて艶なす今年竹  
多佳子忌を過ぎて幾夜の蛸かな

田中佐知子

十葉の八重ユトリ口の白さかな  
七味屋のちひさき柝や夏燕  
あをあをとメタセコイアに雲の峰  
父の忌や父の植ゑたるえごの花  
清滝に一夜泊りの蛸狩

中村洋子

嘴削ることに始まる鵜飼かな  
鵜飼待つ屋形次々灯の入り  
鵜と鵜匠出陣前の呼吸かな

浅田光代

鵜篝に手長の影の躍りける  
立ち上る篝ひとときは疲鵜に

山本浪子

屋上の花壇に実る李かな  
久闊を叙するが如し青大将  
くちなはに大きな声をはばからず  
泳ぎつくまで見届けし蛇の屋  
玫瑰や鉄塊となり貨車の過ぐ

間島あきら

川越えの今日股通し夏来る  
丁字屋の空翻す夏燕  
天下布武に美濃事始城若葉  
浮雲のすでにむらさき祭笛  
葎摘む朝日將軍旗上げ地



# 風土独語／神蔵 器



落し文 西行桜のもとにかな

田中佐知子

六月二日、京都句会に先立って、洛南の地に大原野神社、勝持寺、そして業平の十輪寺などを吟行した。

勝持寺は西行が保安六年（一一四〇）十月十五日出家し、この寺で剃髪されたと伝えられる。真実であるかどうかは分からないが、剃髪石、西行桜（現在は三代目）、西行坐像、そして西行庵あとなど西行ゆかりのものが多い。

掲出句は西行桜の下で落し文を拾った、ということであるが、西行桜の下であるだけに、西行からどんな文か、胸のとときめく思いである。私は瑠璃光殿で住職のご案内をいただいた後、いったん庫裡に戻り、一人引き返して再び西行桜の下に立った。このまま立ち去るにしのびなかつたのである。

世阿弥の「西行桜」は

花見にと群れつつ人の来るのみぞ

あたら桜科にぞありける

という西行の歌を、この寺でのものとした世阿弥の創意によるものであるが、桜狩りに大勢の人びとが見え、折角の閑居をさまたげられた西行は思わず「あたら桜科にぞありける」と不満をも

らしてしまう。それを聞き答めた老桜の精（シテ）が、それはいわれのない責任転嫁で「非常無心の草木の花に憂き世の科はあらじ」と反論する。

しかし両者はやがて理解し融けあつて「惜しむべき惜しむべし、得難きは時、逢ひ難きは友」と春宵一刻価千金の良夜の興へと流れゆく。

私は作者が得た落し文を見ていない。おそらくそれには何も書いてなかつたのではなからうか。西行の歌の円はずでに結ばれ、心は慈悲に溢れていたのである。私は老桜と西行の静かに舞う舞台のかすかな衣擦の音、いな西行桜から小塩山へとわたる風のささやきを聞いていた。

嘴削ることに始まる鵜飼かな

浅田 光代

鵜飼の前には鵜の嘴を削る。これは鵜飼の際、鮎に鵜の噛んだ跡や、出来るだけ傷つけないためと聞いている。鵜飼は魚を捕える鵜の本性を利用した漁法であるが、鵜にとつては残酷なことである。歯医者で歯を削られた経験のある者はよく分かると思うが、何とも不快なものである。その上鵜の場合は喉を軽く縛って食べた鮎をのみ込まないようにし、時々吐き出させるのであるから辛いことである。なお、献上の鮎には、少し嘴のあとのあるものの方が良いとか、本当か嘘か。

# 風土集



## 神蔵 器選

イキス 三句

さくらんぼ女王在城の旗掲ぐ  
時の日の古城の地下にワイン買ふ  
ロンドンパブ昼賑はひし薄暑かな  
死ねるほど睡眠剤溜め梅雨に入る  
香のもの喰むよき音にして立夏かな  
翻訳の童話が届く青山椒  
印泥の天地返しや走り梅雨  
不動尊へしるべのほたるぶくろかな  
ひと攪み足す蚕豆を市に買ふ  
立葵 稜線 低き安房郡  
衣更へて葉書一枚出しにゆく  
宿坊に井戸使ふ音明易し  
薫風や志功の女人らも円ら  
水美し額紫陽花の城下町

東京

遊橋恵美子

東京

林 裕子

市原

代田 青鳥

保養所に戻る常磐木落葉かな  
鯉跳ねる音して梅雨のはじまりぬ  
城跡の濠の濁りや夏燕  
揚羽蝶仰ぐ高みに棕櫚の花  
梅雨冷や猫の占めたる椅子一つ  
村ぬちを渡る朝風茄子の花  
信楽の壺に窯変かきつばた  
青田風本籍ありし村に入る  
夏草や美濃に廃れし登り窯  
猫の爪音なく開きし網戸かな  
神輿庫の扉に卍木下闇  
カサブランカ発つバーグマンの夏帽子  
棘のなき薔薇なり薔薇の悲しけれ  
県境の平家伝説朴の花  
円座して粽結ふ手の速さかな

津山

生田 作

東京

奥田 弦鬼

横浜

池田加代子